

近世・近代風俗画における服飾表現に関する分野横断的研究
—小袖及び着物の編年的研究への絵画研究の活用—

The Cross-genre Study of Costume Depictions in Pre-modern and Modern Genre Paintings
—Applications of painting scholarship to the chronological study of Kosode and Kimono
garments—

長崎 巖^{*1+}, 田沢 裕賀^{*2+}, 家田 奈穂^{*3+}, 西井 智美^{*1+}
Iwao Nagasaki^{*1+}, Hiroyoshi Tazawa^{*2+}, Naho Ieda^{*3+}, and Satomi Nishii^{*1+}

*1 共立女子大学家政部 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1
Faculty of Home Economics, Kyoritsu Women's University,
2-2-1 Hitotsubashi Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

*2 東京国立博物館
Tokyo National Museum, Tokyo, Japan

*3 ニューオータニ美術館
New Otani Museum of Art, Tokyo, Japan

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract: The following findings were obtained through the examination of early modern genre paintings, hand-painted Ukiyo-e, woodblock Ukiyo-e, and early modern Japanese paintings, as well through the examination of early modern and modern-historical textiles (clothing accessories), all kept by each of the visited art museums.

1. The relationship between the depictions of kosode kimonos that can be seen in hand-painted Ukiyo-e from the Edo period and the transition of the kosode form has been established
2. It was revealed that the works known as “early modern genre paintings”, that were produced between the Momoyama period and early Edo period, were created in a time period somewhat different from what the existing theory holds.
3. In focusing on the depiction of clothing in Japanese paintings, it was found that in modern-historical works, there was not only a strong awareness of clothing of the same period, but an intentional incorporation of elements from past clothing into the works.

Additionally, a close relation is visually shown between the kosode clothing depicted in Edo period hand-painted Ukiyo-e and the actual kosode clothing from the same era. The transition of the kosode form

*1) nagasaki@kyoritsu-wu.ac.jp

is also indicated through the works. This could be seen in the “Townswomen Fashion: Kosode and Ukiyo-e Paintings in Edo Period” (October 3 – November 23, 2009) project exhibit at the New Otani Art Museum that displayed Edo Period hand-painted Ukiyo-e, kosode, as well as Hinagatabon.

By comparing the period in which every hand-painted Ukiyo-e was created based on the art research to the historical timeline of kosode that has been established through utilizing material such as the Kosode Hinagatabon, it has become evident that the clothing shown in the hand-painted Ukiyo-e works faithfully depicts the actual clothing of its time.

A research presentation was conducted on the theme “Inspecting Noh Paintings from Various Angles – The “Hyakuman” Emaki Hand Scrolls and Picture Books”, which discussed the topic of “Clothing Depictions in ‘Hyakuman’ Emaki Hand Scrolls Picture Books”.

The depictions of clothing in kyogen emaki hand scrolls and kyogen picture books suggests a contextual relationship for the creation period of two types of similar works, and provided an opportunity for further examination through art research.

While paintings fundamentally serve an essential role in the historical research of the intangible cultural arts, this examination has established that the clothing depicted in paintings is a clue for judging the reliability of the content in the painting or for estimating the painting’s time period of origin.

要旨

各美術館所蔵の近世初期風俗画、肉筆浮世絵、浮世絵版画、近代日本画の調査と近世・近代染織品(服飾品)の調査を通じて、以下の結果を得た。

- 1.江戸時代の肉筆浮世絵に見られる服飾表現と小袖服飾の様式変遷との関係。また浮世絵の制作年代との関係を明らかにした。
- 2.桃山時代から江戸時代初期に制作された、いわゆる「近世初期風俗画」に見られる服飾表現から、作品の制作年代を類推し、既存の説とは幾分異なる時期の制作になることを明らかにした。
- 3.日本画における服飾表現に注目し、近代においては服飾表現が同時代の服飾を強く意識しているだけでなく、過去の服飾をも意図的に取り込み描いていることを明らかにした。

また、ニューオータニ美術館において、江戸時代の肉筆浮世絵と小袖類及び小袖雛形本を展示する企画展「肉筆浮世絵と江戸のファッション 町人女性の美意識」(平成 21 年 10 月 3 日～11 月 23 日)を開催し、江戸時代の肉筆浮世絵に描かれている小袖服飾類と現存の小袖服飾類の密接な関係を視覚的に示すとともに、江戸時代の小袖様式の変遷を作品によって示した。絵画史研究に基づく肉筆浮世絵各作品の制作年代と、服飾史における小袖雛形本等を用いた小袖の様式編年結果との比較した結果、肉筆浮世絵に描かれた服飾は、当時の実際の服飾を忠実に移していることが明らかになった。

第 34 回芸能史研究会東京例会・テーマ「能楽の絵画資料を多角的に検証する – 「百万」絵巻・絵本を対象として –」において、「「百万」絵巻・絵本に見られる服飾表現」と題し、研究発表を行った。狂言絵巻、狂言絵本に見られる服飾表現から、二種類の類似作品の制作年代の前後関係を示唆し、今後の絵画研究による検証のきっかけを与えた。本来、無形文化である芸能の史的研究においては、絵画資料が重要な役割を果たすと考えられるが、その際に、絵画に描かれた内容の信憑性の判断や、絵画の制作年代の推定に、画中の服飾表現が手がかりになることを明らかにした。

配当決定額

平成 21 年度	1,400,000 円
平成 22 年度	1,300,000 円
平成 23 年度	1,440,000 円
合計	4,140,000 円

研究の目的

近年、学問一般において分野間の研究交流は著しく、またその成果もめざましいものがある。服飾文化研究においてもそうした方向性は必要であり、実行されれば大きな成果が得られる可能性を含んでいる。服飾史研究者と絵画史研究者との協力による分野横断的研究はその一つであると考えられる。服飾史よりも研究の歴史が長い絵画史は、服飾史研究にとって共同研究による現実的な効果が最も期待される分野であろう。

本研究は、近世から近代にかけての風俗画に見られる緻密な服飾表現に注目し、絵画史における技法論と作家論に基づく編年的研究成果を服飾史研究に活かす具体的な手法を作り上げることを第一の目的とする。また同時に、そうして得られた服飾史的情報を絵画史研究にフィードバックするための方法論をも確立することを第二の目的とする。

具体的には、近世初期風俗画を出発点とし、江戸時代に確立された肉筆浮世絵・浮世絵版画、及び明治から昭和初期に至る近代美人画に見られる服飾表現の具体相と変遷を、絵画史における編年的研究成果を活用して整理・分析し、これらを服飾史における既存の研究成果と照合して、一致点及び相異点、また隔たりの具体相について明らかにする。

さらには、実在した服飾事象が絵画に表現される際の「翻訳の方程式」ともいべき特徴を見出すことを目指す。なぜなら、この特徴を把握すれば描かれた服飾によって絵画作品の制作年代の推定も容易になると考えられるからである。

研究の方法

1. 美術館・博物館所蔵の近世初期風俗画、及び肉筆浮世絵・浮世絵版画・近代美人画から、各時代を代表する作品を選定し、実物調査を行ってその服飾表現の具体相と特徴を整理する。
2. 江戸時代の作品においては小袖雛形本や呉服注文帳なども資料として併用しながら、上記の結果と現存する服飾遺品に見られる様式との比較を行なう。
3. 両者の整合性及び相違点を明らかにした後、実在の衣服が絵画として表現される際の具体相を明らかにする。

研究の実施計画

【平成 21 年度】

奈良県立美術館・ニューオータニ美術館ほかの肉筆浮世絵を中心に調査を行ない、描かれた人物像の服飾表現の整理と分析を行なう。次に、各所所蔵の現存服飾作品及び小袖雛形本等の調査を行ない、肉筆浮世絵に描かれた服飾と服飾史研究における既存の様式編年との整合性や遊離性について検証する。さらに絵画史の研究成果に導かれるそれぞれの絵画作品の制作時期との重ね合わせ作業を行なう。

これらの作業により、女性像が多く、しかも単身像の占める割合が大きい肉筆浮世絵において、まずは繊細な服飾描写から、着物に用いられている染織技法や意匠に関する情報がどれほど得られるのか、またそれらはどの程度忠実に実在の衣服を描いているのかがわかり、さらに絵画であるがゆえの脚色あるいはタイムラグがあるとすれば、それは具体的にどのようなものであったかを、明らかにすることができる。さらに服飾史研究からはこれまであまり関心を持たれてこなかった明治時代以降の美人画作品につき、服飾描写が優れた作品をリストアップし、平成 22 年度以降の調査のための準備を行なう。

【平成 22 年度】

平成 22 年度も、平成 21 年度に引き続き、九州国立博物館・福岡市博物館・渡辺美術館・奈良県立美術館・MOA 美術館などを中心に調査を行ない、描かれた人物像の服飾表現の整理と分析を行なう。また肉筆浮世絵に描かれた服飾と服飾史研究における既存の様式編年との整合性や遊離性について検証する。さらに絵画史の研究成果に導かれるそれぞれの絵画作品の制作時期との重ね合わせ作業を行なう。

これらの作業により、女性像が多く、しかも単身像の占める割合が大きい肉筆浮世絵において、まずは繊細な服飾描写から、着物に用いられている染織技法や意匠に関する情報がどれほど得られるのか、またそれらはどの程度忠実に実在の衣服を描いているのかがわかり、さらに絵画であるがゆえの脚色あるいはタイムラグがあるとすれば、それは具体的にどのようなものであったかを、明らかにすることができる。

【平成 23 年度】

平成 23 年度も、平成 21～22 年度に引き続き、風俗画を所蔵する美術館博物館を中心に調査を行ない、描かれた人物像の服飾表現の整理と分析を行なう。また、平成 21 年度の研究会においてリストアップした、江戸時代から明治・大正・昭和時代初期にかけての小袖服飾類及び着物類を所蔵している、知覧博物館・鹿児島県立博物館などを中心に調査を行ない、肉筆浮世絵に描かれた服飾と服飾史研究における既存の様式編年との整合性や遊離性について検証する。さらに絵画史の研究成果に導かれるそれぞれの絵画作品の制作時期との重ね合わせ作業を行なう。

これらの作業により、女性像が多く、しかも単身像の占める割合が大きい肉筆浮世絵において、まずは繊細な服飾描写から、着物に用いられている染織技法や意匠に関する情報がどれほど得られるのか、またそれらはどの程度忠実に実在の衣服を描いているのかがわかり、さらに絵画であるがゆえの脚色あるいはタイムラグがあるとすれば、それは具体的にどのようなものであったかを、明らかにすることができる。

また、平成 23 年度末には、研究成果報告書を印刷・製本し、調査作品所蔵先等の研究関係者への研究成果の報告を行なう。

研究の成果

【平成 21 年度】

本研究での重要なプロセスのひとつである、美術館・博物館所蔵の近世初期風俗画、及び肉筆浮世絵・浮世絵版画・近代美人画から、各時代を代表する作品を選定し、その服飾表現の具体相と特徴を整理する、という作業の一環として以下のことを行なった。

- (1) 平成 21 年 8 月 24 日、文化ファッション研究機構・会議室で開催された第一回研究会において、今後の研究方針と具体的な研究手法などについて協議した後、近世初期風俗画、及び肉筆浮世絵・浮世絵版画・近代美人画を所蔵する 16 の美術館・博物館・個人をリストアップした。
- (2) ニューオータニ美術館において、江戸時代の肉筆浮世絵と小袖類及び小袖雛形本を展示する企画

展「肉筆浮世絵と江戸のファッション 町人女性の美意識」(平成 21 年 10 月 3 日～11 月 23 日)を開催し、江戸時代の肉筆浮世絵に描かれている小袖服飾類と現存の小袖服飾類の密接な関係を視覚的に示すとともに、江戸時代の小袖様式の変遷を作品によって示した。



(3) 平成 21 年 10 月 31 日、ニューオータニ美術館において、開催中の「肉筆浮世絵と江戸のファッション 町人女性の美意識」展に展示中の江戸時代前期から後期にかけての肉筆浮世絵及び同時代の小袖服飾類、小袖雛形本(版本及び肉筆)の調査を行なうとともに、これらの相関関係について討議、研究を行った。

・菱川師宣筆「元禄風俗図」について(ディスカッション)

元禄時代とされている小袖の作例において、模様表現は比較的柄が大きいことが指摘されているが、菱川師宣の「元禄風俗図」に描かれた小袖においてもおおむね同様の傾向が認められた。

菱川師宣は千葉県保田の縫箔屋の出身である。菱川師宣が下絵を描き、父親の菱川吉左衛門が刺繍を施した「刺繍 釈迦涅槃図」が有名であることから、染織品は師宣にとって極めて身近なものであり、その服飾描写においても、忠実に表現がされているのではないかと考えられる。

・肉筆浮世絵の享受者について(ディスカッション)

肉筆浮世絵に描かれる対象については、圧倒的に町人が多く、武家女性の描かれている菱川師宣の「元禄風俗図」に見られる武家女性の小袖は町人女性のそれに比較して柄が小さい。また武家女性を描いた浮世絵が少ないことから、浮世絵の享受者は一体誰であったのかが、しばしば疑問にあがる。これまでは、経済的にも豊かにならぬ上流武家男性が発注していたと考えられていた。その根拠の一つは、狩野派(幕府お抱えの絵師)の画風に忠実な浮世絵も現存するためである。例えば、安藤出雲守が注文して肖像画として描かせた肉筆浮世絵が現存している。これは一般的な婦人肖像画の形をとるものではなく、明らかに浮世絵と分かるものである。

武家男性・女性とともに、普段、武家女性を見慣れている。描かれる人物に武家女性が少ないのは、武家男性・女性にとって、武家女性は普段見慣れたつまらないものだと感じられていたからではないかと考えられる。武家男性・女性は、普段見慣れない、町人女性に魅力を感じ、これを描いた肉筆浮世絵を発注・購入したいと思ったのではないか。その際に、武家女性が肉筆浮世絵を通して見ていたのは、町人女性のファッションであったと考えられる。需要や供給から考えても肉筆浮世絵の主たる需要者は、武

家男性・女性が享受者、という結論に達した。武家女性がファッションを見るために肉筆浮世絵を鑑賞するのは、これに小袖雛形本と同じ、ファッションブックとしての役割があったからであろう。

・肉筆浮世絵の絵師について(ディスカッション)

江戸時代には、町人と武家を混交しないようにしていたために、浮世絵を描く画師は、町人(職人)層である。社会階層が秩序付けされた江戸時代において、商人層が武家を描くことははばかれたと考えられる。師宣の絵には「濁」の文字が多い。小袖雛形本にもこの文字が見られる。師宣は小袖雛形本にも絵を描いていたと考えられる。

・舞踊図について(家田による発表)

サントリー美術館蔵の舞踊図に描かれた小袖は、比較的小さい区画の中に模様が配される意匠形式をとる。これは江戸時代初期慶長年間の小袖の様式である。これに対してニューオータニ美術館蔵の舞踊図の小袖は、全体に模様を配置するものであり、桃山時代の小袖様式に当てはまっている。サントリー美術館とニューオータニ美術館の舞踊図は系統の源流を同じくし、枝分かれしたものと言われている。しかし、模様の表現・構図から見ると、ニューオータニの舞踊図の方がサントリーのものに比べ、時代が上がると考えられる。また、京都市蔵の舞踊図、及びボストン美術館蔵の舞踊図は、小袖から腕が出ておらず、桃山時代としては不自然である。

(4)平成 21 年 11 月 16 日、近世・近代の帯の様式変遷を明かにする一環として文化学園服飾博物館において瓢箪尾長鳥蝶菊御簾模様錦帯(綿入)調査を行った。

(5)平成 21 年 12 月 14 日～16 日、京都文化博物館において、明治時代の着物服飾類、特に吉川観方コレクションの子供のきもの 24 点の調査を行なった。その結果、近世・近代の武家・町人男児と女児の着物の意匠の違いが明らかになった。近世・近代における絵画に書かれたこどもの服飾表現を知る上で非常に有効であるといえる。

(6)平成 21 年 12 月 20 日～22 日、鳥取市・渡辺美術館所蔵の屏風を中心とする近世初期風俗画の調査を行なったが、その際、同美術館に所蔵されている染織品も調査した。

特に「曾我物語図屏風」では、近世初期の絵画に描かれた武家・町人等の服飾が明らかになった。本作品は、以前は桃山末期から江戸時代初期の作品とされていたもので、近年ではそれより少し制作年代が古いものではないかという説が見られるようになってきているが、今回の調査で、描かれた服飾の特徴からさらに制作年代を桃山時代前半まで上げることができる可能性を指摘できた。

染織品については、陣羽織、歌舞伎衣裳等の作品調査を行なった。陣羽織については合戦図に、歌舞伎衣裳については風俗画に描かれる事も多いため、絵画・染織品の分野横断的な調査を行なう事ができた。

(7)平成 22 年 1 月 9 日～11 日、四国における大名家伝来の近世染織作品及び風俗画の所在確認のため、香川県琴平町の金毘羅美術館、徳島県徳島市の徳島市立徳島城博物館と徳島県立博物館の調査を行なった。徳島城博物館では、蜂須賀家伝来の染織品の調査、合戦図屏風の調査を行なったが、その結果、蜂須賀家伝来衣裳のうち男性衣裳はわずかながら所蔵されているが、女性衣裳はわずかしか所蔵されていないことがわかった。また、その後の追跡調査により、蜂須賀家所蔵の染織品のうち、陣羽織などに関しては、現在個人蔵となっており、また小袖に関しては一部が京都・京都工芸繊維大学などに所蔵されていることが明らかになった。

高松城資料室では、松平家伝来の染織品の所在調査を行なったが、ここでも染織品は所蔵されていないことが明らかとなった。

(8)平成 22 年 2 月 25 日～26 日、九州国立博物館において近世初期風俗画の調査を行なった。

九州国立博物館蔵「唐船・南蛮船図屏風」(6 曲 1 双、江戸時代・17 世紀)は、南蛮と日本の交易を仲介する中国船(唐船)の様子が描かれている点に特徴がある。制作年代は江戸時代初期と考えられ、本作品からは当時の日本人・南蛮人・中国人の服飾様式を窺うことができるだけでなく、描かれた輸出入品から当時の染織品の様式を知る事ができた。

文化庁蔵・狩野内膳筆「南蛮屏風」(6 曲 1 双、桃山～江戸時代・16～17 世紀)においては、日本人よりもポルトガル人の描写が比較的多く見られる。近世初期の南蛮人の服飾は日本の染織に多くの影響を与えており、「唐船・南蛮船図屏風」と合わせて、南蛮人の服飾についても注目したい。

【平成 22 年度】

平成 21 年度における、近世初期風俗画、肉筆浮世絵、近代風俗画の所在確認作業を受けて、22 年度もこれらの絵画作品及びこれらの時代に制作されたと考えられる染織品の調査を行なった。

絵画作品(近世風俗画や浮世絵)の調査においては、絵画における服飾描写が、作品の制作年代を知る大きな手立てとなることが明らかになった。また不自然な服飾描写を発見することによって、それが真作ではなく模古的絵画作品である可能性を指摘できることも明らかになった。

(1)平成 22 年 6 月 15 日(火)～16 日(水)

九州国立博物館蔵「邸内遊楽図屏風」(2 曲 1 隻、江戸時代・17 世紀)、九州国立博物館蔵「洛中洛外図屏風」(6 曲 1 双、桃山時代・16 世紀)、九州国立博物館蔵「駿河湾南蛮船来航図屏風」(6 曲 1 双うち左隻を調査;右隻は本課題で、2010 年 2 月 26 に調査済)、江戸時代・17 世紀)、及び太平洋セメント(津久見市)蔵「南蛮人遊楽図屏風」(6 曲 1 隻、桃山～江戸時代・16～17 世紀)の計 4 件の調査を行った。今回の調査においても、作品に描かれた服飾から制作年代の微妙な違いが判断できる可能性が明らかとなった。

(2)平成 23 年 1 月 14 日(金)～16 日(日)

彦根城博物館、細見美術館、城陽市歴史民俗資料館五里ごり館、徳川美術館、MOA 美術館

彦根城博物館において、「翁 ー新年を寿ぐー」展を観覧し、井伊家伝来の能装束と、能関係の近世絵画の比較検討を行った。

MOA 美術館では、MOA 美術館所蔵の肉筆浮世絵(勝川春章筆・重要文化財「雪月花図」)ほか、菱川師宣、宮川長春、喜多川歌麿、葛飾北斎らが描いた肉筆浮世絵約 30 点を調査した。

(3)平成 23 年 1 月 22 日(土)～24 日(月)

石垣市立八重山博物館、宮良殿内においては八重山上布等の染織品や、蔵元絵師によって描かれた風俗画等の調査を行った。

沖縄県立博物館・美術館、首里城公園、那覇市歴史博物館、沖縄伝統工芸館琉球の館においては、国宝尚家資料に含まれる紅型装束や、緋衣装等の染織品を調査し、また尚家の江戸上り等を描いた近世風俗画の調査を行った。調査により、琉球の風俗を描いた絵画においては、おもに男性の服飾を描いたものが多く、一方染織品においては、女性の衣服が多く残っていることが明らかとなった。現存資料におけるこれらのねじれをどのように解消していくのかが、今後の研究の課題であると考えられる。

(4)平成 23 年 2 月 10 日(木)～12 日(土)

細川コレクション永青文庫展示室、熊本城、熊本市立熊本博物館、旧細川刑部邸において、細川家伝来の近世・近代風俗画及び染織品の調査を行った。

熊本県立美術館「浮世絵にみるファッションの世界」においては、熊本県立美術館に寄贈された今西コレクションの浮世絵 47 点を調査し、作品の時代表記(絵画研究における制作年代の推測)と描かれている服飾表現についての比較検討をした。その結果、今西コレクションの浮世絵に描かれた服飾の様式年代と絵画としての時代表記には、大きな時代の開きがあることがわかった。この調査において発見された問題点が、今後の本研究の存在意味の大きさを示唆しており、重要である。

(5)平成 22 年 12 月 4 日(土)

国立能楽堂において開催された第 34 回芸能史研究会東京例会(テーマ「能楽の絵画資料を多角的に検証する - 「百万」絵巻・絵本を対象として -」)において、「「百万」絵巻・絵本に見られる服飾表現」と題し、長崎が研究発表を行った。

本来、無形文化である芸能の史的研究においては、絵画資料が重要な役割を果たすと考えられるが、その際に、絵画に描かれた内容の信憑性の判断や、絵画の制作年代の推定に、画中の服飾表現が手がかりになることを明らかにした。

第34回芸能史研究会東京例会
 テーマ 能楽の絵画資料を多角的に検証する
 — 「百万」絵巻・絵本を対象として —
 日時 2010年12月4日(土) 午後13時30分~17時30分
 会場 国立能楽堂 大講義室 (F2配内4F)
 パネリスト
 長崎 薫 氏
 「百万」絵巻・絵本—美術史研究からの検証
 山崎 真造 氏
 「百万」絵巻・絵本に見られる服飾表現
 小林 健二 氏(司会兼)
 「百万」絵巻・絵本—美術史研究からの検証
 小林 健二 氏(司会兼)
 「百万」絵巻・絵本—美術史研究からの検証
 *当日は講義室において、特別に国立能楽堂所蔵「百万」絵巻が展示されます。
 主催：藝能史研究会
 〒602-0855 京都市上京区河原町通尾神下5上生洲町221キトビル303号
 電話・FAX 075-251-2571
 e-mail guzohi@med.higashioe.ne.jp
 http://www.sh.higashioe.ne.jp/~guzohi/

【平成 23 年度】

(1)平成 23 年 4 月 13 日(水)~4 月 15 日(金)、大和文華館、大阪市立美術館、大阪歴史博物館において、近世・近代風俗画調査を行った。大和文華館においては、近世・近代風俗画、特に女性が描かれた風俗画・美人画を中心に調査を行った。国宝婦女遊楽図屏風(松浦屏風)については、絵画史の分野(大和文華館や、国宝指定の際に示された制作年代)では、江戸時代前期の作とされているが、服飾表現の観点(服装史)から、描かれた人物の着装している服飾表現は、江戸時代後期ものと考察された。この他にも、56 点の近世・近代の風俗画について調査を行った。

大阪市立美術館においては、歌川国芳の浮世絵について、調査を行った。特に、役者絵や、美人画、また風景画の中でも、人物の描かれたものについて、その服飾表現に着目した。描かれた服飾は、格子や縞模様のも等、江戸時代後期(幕末期)に流行したのが見られ、絵画の制作年代と、服飾表現の時代の一致を確認することができた。

大阪歴史博物館においては、明治期の超絶技巧と呼ばれる、工芸技術に着目して、調査を行った。この時代の工芸品においては、写実的な表現が特徴と言える。

染織品も絵画の分野に含まれるものであるが、染織品についても、明治期に見られる写実的表現は例

外ではなく、明治期の着物の表現、また絵画表現への繋がりを明らかにすることができた。

(2)平成 23 年 7 月 3 日(日)～7 月 4 日(月)、福岡市博物館において福岡市博物館所蔵の洛中洛外図屏風及び、旧吉川観方コレクション浮世絵の調査をおこなった。

福岡市博物館所蔵の重要文化財「洛中洛外図屏風」は、絵画研究の視点、染織文化研究の双方の視点から見ても、近世初期(慶長の頃)の作品であることがわかった。また、昨年度・一昨年に九州国立博物館において調査をおこなった、洛中洛外図屏風や、南蛮図屏風との比較・検討を行なう必要が見出された。

浮世絵の調査では、旧吉川観方コレクションの美人画等、特に女性の着衣の様子が見てとれる江戸時代後期頃の作品を中心に 27 点について調査を行った。これらの作品においても、制作年代(作者の生没年)と、描かれた服飾表現との比較を行った。

(3)平成 21 年度末に購入した小袖 3 点・浮世絵 6 点については、平成 22 年度に調査を行ったが、この成果を共立女子大学本館 1 階展示場において、「chic beauty -明治の着物と装身具-」と題する展覧会(平成 23 年 7 月 7 日～8 月 6 日)に反映した。



(4)平成 23 年 10 月 29 日(土)～10 月 30 日(日)に京都府京都文化博物館小袖調査、細見美術館公家装束調査、相国寺承天閣美術館能装束調査を行った。

(5)平成 23 年 11 月 4 日(金)～11 月 5 日(土)

金沢能楽美術館において、金春座伝来能装束の調査、成巽閣において、前田家伝来小袖・帯の調査を行った。藩老本多蔵品館所蔵の武家染織品および、石川県立美術館所蔵染織品の調査を行った。

(6)平成 23 年 11 月 22 日(火)～11 月 23 日(水)、京都府京都文化博物館小袖調査、中村家個人蔵染織品調査を行った。大阪歴史博物館においては、近代のきもの、広告等の写真、日本画等の調査を行った。

(7)平成 23 年 12 月 9(金)～12 月 12 日(月)に、尚古集成館・ミュージアム知覧・宮崎県総合博物館における絵画・染織品調査を行った。

(8)平成 23 年 12 月 16 日(金)～12 月 19 日(月)シーボルト記念館、出島史料館、松浦史料博物館、長崎歴史文化博物館において、絵画・染織品調査を行った。

シーボルト記念館、出島史料館、長崎歴史文化博物館において、海外文化の流入による影響や、近

世初期における長崎の風俗についての調査を行った。

主な発表論文等

1. 株式会社ニューオータニ(編)『「肉筆浮世絵と江戸のファッション 町人女性の美意識」展カタログ』
「江戸時代町人女性のファッション ー小袖の変遷と肉筆浮世絵における服飾描写ー」長崎巖(筆),
pp.4-39,(2009)
2. 株式会社ニューオータニ(編)『「肉筆浮世絵と江戸のファッション 町人女性の美意識」展カタログ』
「右田年英<新橋元禄舞>について」家田奈穂(筆), pp.40-44,(2009)
3. 株式会社ニューオータニ(編)「安田鞞彦筆<<神農>>について」家田奈穂(筆)、『「安田鞞彦-花を愛
でる心」展カタログ』, pp.67-68,(2010)
4. 東京国立博物館(編)『「写楽」展カタログ』「写楽の謎 版元蔦屋重三郎と写楽の企て」田沢裕賀
(筆), pp.13-20,(2011)
5. 平凡社(編)『別冊太陽 写楽』「写楽の役者絵の着物」長崎巖(筆), pp.116-123,(2011)
6. 鎌倉市鐮木清方記念美術館(編)『鎌倉市鐮木清方記念美術館叢書 13 鐮木清方の美人画 ー
樋口一葉著作関係及び『婦人世界』・『婦人公論』関係作品所収ー』「鐮木清方の美人画に見られる
服飾表現」長崎巖(筆), pp.2-5,(2012)